View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

学習システム促進研究センター
『学習システム研究』第 4 号　2016（pp.67-78）

地理学者集団における「真正な実践」の変容・成長の解明

－同一地域をめぐる異なる時代の研究を比較して－

大坂 遊・草原 和博

本研究は，専門科学者がおこなう「真正な実践」の解明に向けたシリーズ研究のうち，知識の社会領域の中でも地理学者の研究に注目し，「地理学者ならではの学びの過程とはどのようなものか」「その過程は，地理教師が教材研究として地理学論文を読み解く上でどのように活かすことができるか」を解明することを目的とする。そのために，時代の異なる２つのインド地域研究の成果報告書を対象に，（１）研究の目的と方法，（２）地域の選定，（３）記述のスタイルと構成を比較することで，地理学者の学びがどのように変化・成長しているのかの解明を試みた。分析の結果，以下のことが明らかになった。２つの時代の研究は，（１）地誌学研究のパラダイムの変化や時代の要請などをふまえて，研究の問題意識が，「農村地域の社会経済構造の把握」から「地域格差とそれを解消する条件の解明」へと変化・深化していること，（２）いずれも同じインド農村地域をフィールドに取り上げる点では共通するものの，継続的な調査活動による研究者同士・現地住民との人脈ネットワークの開拓によって，より主体的・目的合理的に調査地域を選定できるようになっていること，（３）対象地域で収集したデータの，集落の立地と形態，人口と社会，村の経済を窓とする画一的な記述から，地域を特徴づけるテーマに焦点化した構造的な説明へと変化していること。これらの３点が明らかとなった。またそこから，時代を越えて研究を継続的に修正・深化させる地理学者集団の学びの特質が示唆された。最後にこれらの成果をふまえて，同一地域の研究成果の時系列比較が，教科書記述の意図とコンテキストの理解には有益であることを指摘した。

キーワード：地理学，地理学者集団，地域研究，真正な実践，インド

Transformation and Growth of Geographers' "Authentic Practice":

Comparative Studies on Geographers' Researches Examining on the Same Region but Conducted by Different Generation.

Yu Osaka and Kazuhiro Kusahara

This study is part of a research series aimed at elucidating expert scientists' "authentic practices," and it focuses on the research of geographers in the social domains of knowledge. The study aims to highlight geographers' learning processes and how geography teachers, after reading and understanding geography papers as educational materials, utilize them in their teaching practice. Therefore, using two final reports on

research conducted on Indian regional studies by different generations of geographers, this study examines how the scholarship of geographers has developed and changed by comparing (1) perspective and methodology of research, (2) regional selection criteria, and (3) style and structuring of representation.

The results of the analysis revealed the following. (1) The studies, conducted by two different generations of geographers, showed an evolving and deepening consciousness of problems in regional studies based on paradigm shifts in topographical research, generational axioms, and the like, from understanding rural socioeconomic structures to regional disparities and the conditions to eliminate them. (2) The researchers examined the same rural region of India in their fieldwork; however, they became progressively proficient at selecting survey areas more proactively, purposefully, and rationally due to the development of researchers' personal communication networks with one another and with local populations owing to ongoing research activities. (3) Furthermore, due to these changes, they shifted from standard descriptions serving as a window on "a village's location and shape, its people and society, and the village economy" provided by data collected in the target region, to structural descriptions focused on themes that characterized the region. The results suggest that a special characteristic of group of geographers' learning are continuous revision and deepening of research beyond the generations. In conclusion, in accordance with these results, a time-series comparison of the research output on the same region has been shown to be beneficial in understanding the intentions and context of textbook descriptions.

Keywords：Geography, Group of Geographers, Regional Studies, Authentic Practice, India

１．問題の所在

学校の教師たちは，よりよい授業を目指して，日々教材研究を行っている。中でも日常的な教材研究の対象として「研究」されているのが，教科書であろう。では教師はどのように教科書の記述を読み取り，教材化していくことができるだろうか。

例えば，高校の地理教師がインドについて教材研究しようとした場合を考えてみる。東京書籍の地理 B の教科書（金田ほか，2013）を開くと，インドを取り扱った節のタイトルには「経済成長に着目する」の副題が冠されており，同じページの脇にある「地誌の考察方法」には，地域を捉える次のようなヒントが提供されている。

> 自然や文化で多様性をもちながら統一性もあわせもつインドは，近年急速に経済を発展させ，世界から注目されている。ここでは経済成長に着目して，人口の増加と農村の変化，都市化と社会の変化，インド世界の求心力などの事象と関連づけて考察しよう。（p.258）

この記述に対応するように，教科書におけるインドの節は「グローバル化と経済発展」「人口の増加と農村の変化」などの 4 つの見開きパートから構成され，さらにその中に「工業化と国土構造の変化」「農業・農村の変化と経済成長」「カースト制度と社会の変化」などの小見出しが配置されている。

深い教材研究のためには，地理教師はこれらの教科書記述はもちろんのこと，その構成が意図しているものと，記述の背景にある見方を検討しなくてはならない。しかし，「なぜ経済成長に注目するのか」「なぜ農村の変化を取り扱うのか」などの背景は，教科書には明示的に説明されていない。従って教師は独自にそれを追究していく必要に迫られる。そこで教師は，教科書の執筆者の意図を汲み取るべく，専門家が対象地域にアプローチした紀行文や新書，地域研究の論文や専門書の類を紐解いていくこととなる。

その時に，地理学者の学びの仕組みを知ることが有益な手がかりとなる。なぜなら彼らは，地域を理解するために，フィールドワークで得られたデータの分析を通して自ら地域の実態を科学的・実証的に解明する「真正な実践」を行っているからである。

筆者らは，大坂ほか（2015）において，地理学論文の構造分析と執筆者への聞き取り調査を実施し，地理学者の「真正な実践」を研究することが，地理教師の教材研究には有効であることを明らかにした。その過程で，地理学者は，同時代の同僚集団やフィールドからの学びに限らず，過去の地理学者集団が到達した知識やノウハウの継承といった「時代を越えた学び」も意図的に実践していることが明らかとなった。

そこで本研究では，これらの成果を発展させるべく，「どうすればより深く，より真正な地域の教材研究が可能か」という問いに答えたい。そのために，同じ地域を扱った時代を異にする２つの研究論文に着目し，地理学者のロングスパンでの「真正な実践」を解明することが，「地域をわかる」教材研究に有用であることを論証したい。

上記の目的を達成するために，本論文では次の手続きをとった。

第１に，広島大学が長期的・継続的に調査してきたインドを題材にした時代を異にする２つの報告書と，そこに含まれる論文を分析対象に選定した。選定の基準は，①インド調査を本格的に開始した初期の報告書と最新の報告書，それぞれに所収されている研究論文から１報ずつ選定すること，②各時期の調査責任者（米倉二郎，岡橋秀典）を筆頭著者とする論文に焦点化すること，③フィールドワークの主たる対象であり，また各時代の報告書のテーマともなっている「農村地域の変貌」を扱った論文とすること，の３点とした。こ

れらの条件を踏まえて執筆者で協議した結果，米倉（1973）の第３章第２節**「ラダバラブプール村－賃織業のさかんな農村－」**（以下，「米倉論文」と略記）と，岡橋（2014a）の第Ⅲ部第８章**「山岳地域農村における就業機会の拡大と世帯経済－ナイニータール近郊村の事例－」**（以下，「岡橋論文」と略記）を分析対象に選んだ。

第２に，米倉論文と岡橋論文のテキスト構造を分析し，論文が執筆された経緯や報告書内での位置づけと内容構成の論理を抽出した。内容構成に関しては，大坂ほか（2015）に倣い，各論文の記述内容を章ごとに要約した上で，章・節ごとに示唆される「問い」と，章間の関係性を図示する形で整理した。

第３に，地理学者の「真正な実践」の時代間の変化を捉えるために，地理学者の学びの成果が読み取れるであろう４つの観点を設定し，比較・考察を試みた。すなわち，「地域の研究目的と方法」「地域の選定規準」「地域の記述スタイル」の４つである。

２．米倉論文の構造

（１）．経緯と位置づけ

米倉論文の基礎となっている現地調査は，文部省の海外学術調査の助成を受けて 1967 年より開始された。米倉論文は，この調査の結果をまとめるべく刊行された報告書（以下「米倉報告書」と略記）の一節である。

米倉報告書には，1967 年から 1969 年までに計３回にわたって，インドならびにバングラデシュの農村部と都市部で実施された調査の成果が収められている。同報告書は，調査の趣旨・目的等を述べた「序論」，インドの集落を概観した「総論」，調査結果とその考察を地域別に叙述した「各論」，の３パートを中核に構成される，500 頁を超える大部である。本稿で取り上げる米倉論文は，「各論」の第３章「ガンガ下流域平野の農村」の一節に位置づく。ガンガ下流域平野では３つの調査村が選定され，村を単位として叙述が行われている。ここでは，農村の変化が著しい「ラダバラブプール村」を扱った論文を検討しよう。

（２）章と内容の構成

米倉論文の構成は，次の通りである。

1　集落の立地と形態
2　人口と社会
1）人口の基本的構成
村落人口と世帯数
年齢別構成
性別構成
世帯別人口規模
2）人口の経済的構成
労働力人口
職業別人口構成
3）人口の社会的構成
カースト別人口
家族タイプ別・カースト別世帯数
教育水準と就学者の構成
4）人口の動態
出稼人口と職業構成
出稼者とその就業地別特色
3　村の経済
1）概観
2）産業別世帯構成
家族構成
世帯別職業構成
3）農業
農家と農地
農作物の構成
土地利用
耕作と生産性
家畜
4）村の織布業
糸原料，製品の流通
村の織布業者
織布
5）農作物の商品化

商品化の方法
6）農家の経済
カーヤスタに属し，上表１－ロに
相当する例
織物業を営むマヒシャの例
注

１）問いの構造，図版の選定

大坂ほか（2015）に従って，米倉論文の問いの構造を整理すると図１のようになる。ここでは章・節のおおまかな問いを整理することを優先し，下位の問いについては，典型的な節に限定して再現することとした。

米倉論文は，ラダバラブプール村の現地調査の結果を地誌的に考察して執筆されたものである。米倉報告書によると，当該の村落への調査は「シェジュール（schedule)」と呼ばれる面接調査表を用いて実施された。本論文は，同村の全 161 世帯の世帯主に対する悉皆調査で得られたデータにもとづいている。

米倉論文は，「集落の立地と形態」「人口と社会」「村の経済」の３つの章で構成され，その下位に 10 の節を，さらに下位に 24 の項を重層的に位置づけて体系化されている。

米倉論文の研究上の主要な問い(リサーチ・クエスション；以下 RQ）は，図１の構造にもとづいて推測すると，「(立地や形態，人口や社会的構成，経済的側面からみて）ラバダラブプール村の特色とは何か」と規定できるだろう。ただし，この RQ やそれに類似する問いは論文内には一切出てこないし，後述するように，RQ に対する答え（リサーチ・アンサー；以下 RA）も明示されていない。あくまで地域の実態・特色を明らかにするという知的営為が自明のこととして論述されているところに，本論文の特質がある。

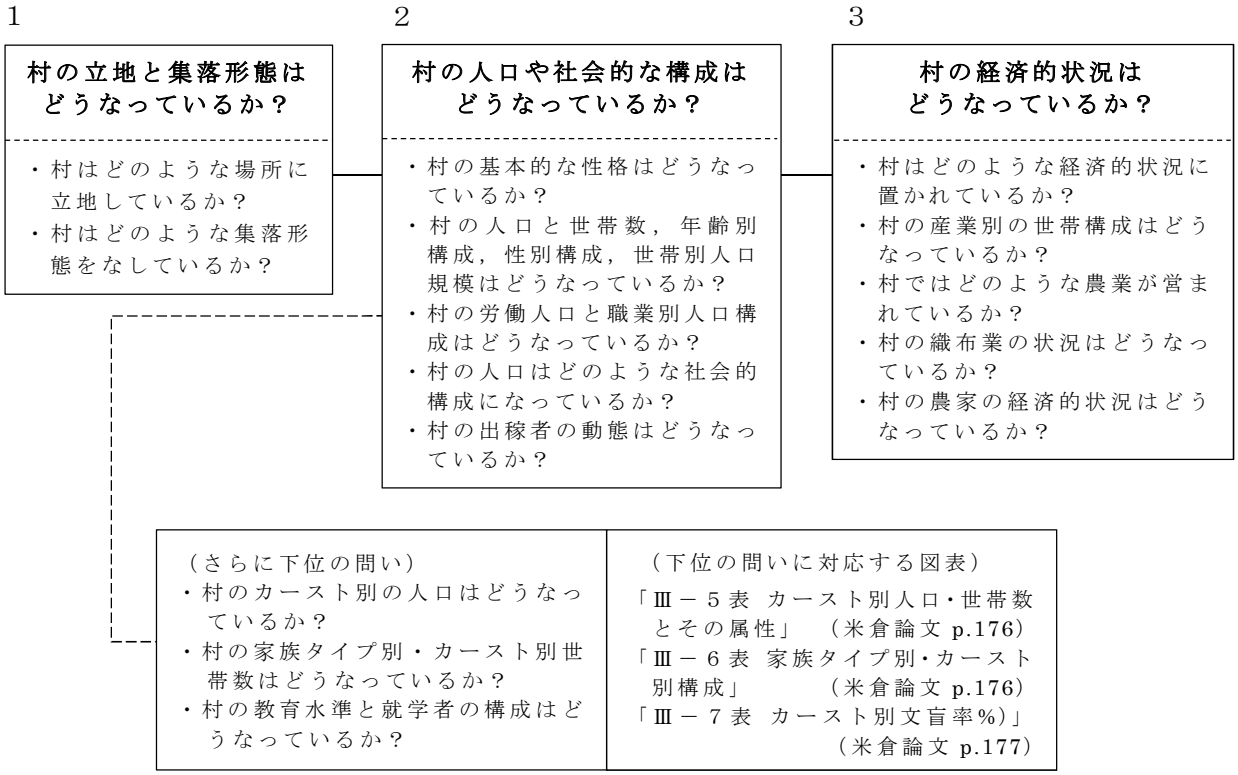

図１　米倉論文の問いの構造

※1 問いは必ずしも各章・節・項のタイトルと一致しない。

※2 筆者作成。

このRQの答えは，直接的に答えられる代わりに，３つのサブカテゴリに分割，分解されて叙述されていく。すなわち，地域の特色は，１章から３章にかけて，村の位置・場所，村の集落，村の人口，村の経済・産業に置き換えられ，かみ砕かれ，個別の要素に還元されて説明されていく。ただし，第１章の内容は他の章に比べると包括的であり，地域の位置と集落に関する基礎的情報が，論文全体の「序論」と見做されているともいえるだろう。

章構成と図１を対照させると明らかなように，章・節・項のタイトルは，原則としてその章・節・項内で追求している問いと合致している。例えば，図１で下位の問いまで示した第２章第３節に注目すると，本節で扱う「人口の社会的構成」は，「カースト別人口」「家族タイプ別・カースト別世帯数」「教育水準と就学者の構成」の３つの項に具体化され，各項では，それぞれについての「どうなっているか？」の答えが詳細に記述されている。各項は独立性が高く，他の項との関連も希薄である。

各項には，これらの詳細な事実を求める問いに答えるために，フィールド調査で得られたデータを加工して整理した図表や，現地の様子を映した写真がセットで掲載されている。例えば「カースト別人口」の項には，「カースト別人口・世帯数とその属性」を数値化した表が配置されているし，各項に対して，原則として１ないしは２つ程度の図表と写真が配当されている。論文内に掲載された図版は合計で48にのぼる（うち表が29，図が４，写真が15）。論文の本文は，これらの図版の内容を説明し概括化するとともに，資料は本文の内容を数値化，視覚化していく，相補的な関係を築いている。

２）地域の捉え方

本論文のタイトルは，繰り返しになるが，「ラダバラブプール村－賃織業のさかんな農村－」である。本題と副題の関係は，前者で対象地域を固有名詞で明示し，後者でそこの地域の特色を規定するようになっている。

論文内でも，本村ではベッドシーツやベッドカバーといった太番手の先染織物の生産・流通を得意とする織布業が盛んなことが特徴であること，またこの織布業が地主層以外の多くの村民にとって農閑期の貴重な現金収入源となっている実態が，各種の資料を交えて叙述されている。

しかし，織布業そのものについて記述されるのは，問いの構造からも論理的に導かれるように，第３章第４節に限られている。むしろ論文全体では，村を構成する多様な要素について，データとその分析・考察の結果から構成されている。

例えば，人口や家族構成，教育水準などの“人と社会”に注目した第２章では，元地主層「カーヤスタ」と呼ばれる支配的カーストと，元小作人層「マーヒシャ」と呼ばれる被支配的カーストが人口の多数を占めていること，村民の教育水準が比較的高く他地域に出稼ぎに出るものが多いことなどが記述される。また，世帯経済や産業の構成，土地利用等の“経済活動”に注目した第３章では，地域の産業は水稲と牧畜が主で，農作物はほとんど商品化できない零細農家が多いこと，実質的に他の労働による現金収入が生活の糧となっていることなどが記述されている。

すなわち，米倉論文では，RQの回答＝地域の特色や傾向を明示的に総括する章や節は存在しない。地域は，収集されたデータに沿って，要素別に淡々と記述されていくにすぎない。執筆者は，自ら現地を調べてみて，他地域に比べてとくに卓越すると認知した諸事象に関しては，節や項のレベルでやや厚めに，かつ詳細に描き出すことで，地域の特色を表現しようとしている。

３．岡橋論文の構造

（１）経緯と位置づけ

岡橋論文の基礎となっている現地調査は，文部科学省による科学研究費補助金の交付を受けて 2007 年より開始された。岡橋論文は，他地域を含む調査結果をまとめた報告書（以下，「岡橋報告書」と略記）の一章である。

本調査の結果は，岡橋（2011）を代表作として繰り返し発表，原稿化されている。本稿で取り上げる岡橋論文は，岡橋報告書の趣旨に合わせてオリジナルを改訂・補筆したものと見做してよい。

岡橋報告書は，インドヒマラヤ地域に位置するウッタラーカンド州の調査結果を総括した論文集である。本書は，「第Ⅰ部　インドの経済発展と地方の開発問題」「第Ⅱ部　ウッタラーカンド州の産業開発と経済発展」「第Ⅲ部クマーウーン地方における都市・農村開発と社会変動」「第Ⅳ部　ウッタラーカンド州の持続的発展に向けて」の４つのパートで構成されている。岡橋論文は，第Ⅲ部の第８章に位置づく。第Ⅲ部のクマーウーン地方は，第６章と第７章で中核都市「ナイニータール」を取り上げている。岡橋論文が注目する「K 村」は，ナイニータールの続きとしての扱いであり，同都市との比較において，近郊の村落の変化を描こうとしたと解される。

（２）内容と章の構成

岡橋論文の構成は次の通りである。

第１節　はじめに
第２節　地域の概観と近年の変化
　２．１　Ｋ村およびＫＴ集落の概観
　２．２　近年の変化
第３節　就業機会の拡大
　　－農業の発展と農外雇用の進展－
　３．１　就業構成の特徴
　３．２　野菜栽培と酪農の展開
第４節　世帯経済の状況とその特徴
　４．１　世帯単位の所得の構成
　４．２　消費財の普及
　４．３　教育水準の向上
第５節　おわりに
注
文献

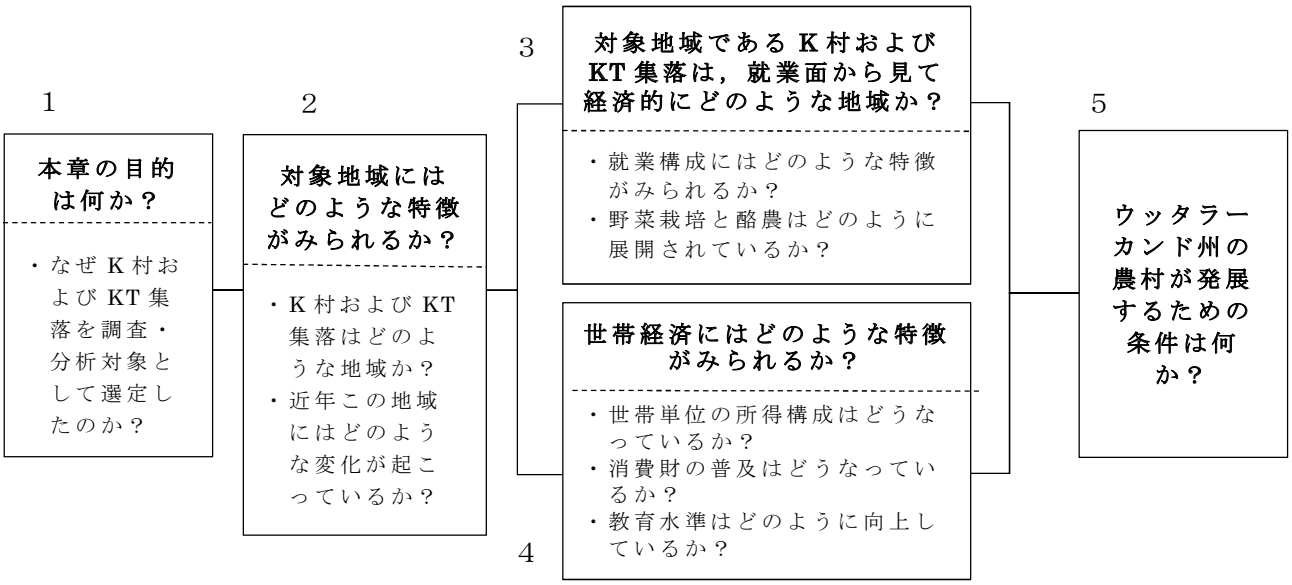

図２　岡橋論文の問いの構造

※筆者作成。

１）問いの構造，図版の選定

岡橋論文の問いの構造を整理すると，図２のようになる。なお岡橋論文の内容は，先述のとおり岡橋（2011）を大幅に改稿しているため，大坂ほか（2015）の分析結果とは必ずしも一致しない。

岡橋論文は，ウッタラーカンド州クマーウーン地方の農村の現地調査の結果を地誌学的に分析・考察して執筆されたものである。本論文は，K村を構成する５つの小村のなかでも，最も規模が大きいKT集落の全89世帯に対する悉皆調査のデータにもとづいている。ゆえに岡橋論文は，K村なかでも実質的にはKT集落の調査結果と言い換えてもよいだろう。

岡橋論文は，「はじめに」「地域の概観と近年の変化」「就業機会の拡大－農業の発展と農外雇用の進展－」「世帯経済の状況とその特徴」「おわりに」の５つの節で構成されている。第２節から第４節の３つの節は，その下位に全部で７つの項を擁している。

章構成と図２から判断すると，岡橋論文のRQは，論理的には「ウッタラーカンド州の農村が発展するための条件とは何か？」だと推定される。論文中ではこのRQは明示されてはいない。しかし，この問いに対するRA（ウッタラーカンド州の農村が発展するためには，農外雇用の拡大，商業的農業の発展，教育水準の向上が鍵となる）は，第５節で示されている。岡橋論文は，直接的にはこのRAを事例研究の結果にもとづいて導くことが目的となっており，農村発展の「条件」を解明するために，とりわけ発展著しいKT集落の特徴と変化その要因を，第３節では就業や産業という地域のマクロな経済状況から，第４節では世帯単位のミクロな収支構造から捉えようとしている。

このKT集落を集中的に分析することの妥当性を説明するために，あらかじめ第１節では，対象地域の選定理由を述べ，続く第２節では，K村とKT集落の特徴を，現地で撮影された写真と地図，センサス等のデータから概括的に記述している。

岡橋論文では，合計で13（うち表が５，図が３，写真が５）の図版が掲載されているが，その大半は，後半の２節に集中する。また，米倉論文の場合とは異なり，図版が担う地位も相対的に低下している。例えば，「ここで○○に注目してみよう」のように，執筆者が主体的に図版を解釈する視点を提起したり，聞き取り調査で得られたインフォーマルな情報から推論を展開したりするなど，本文と図版が対応していない箇所も散見される。

このように岡橋論文を構成している各章は，事象の羅列でも，調査結果の報告書でも，図版の解説集でもない。ウッタラーカンド州の農村発展の条件を解明するという目的の下，アクセントをもった構成となっている。

２）地域の捉え方

本論文のタイトルは，繰り返しになるが，「山岳地域農村における就業機会の拡大と世帯経済－ナイニータール近郊村の事例－」である。本題と副題の関係は，前者では山岳地域の発展の様相を示し，後者では，それが典型的に現れる地域を固有名詞で例示するようになっている。

タイトルからも分かるように，岡橋論文の問題意識は明快である。第１節の冒頭で，本稿の目的を「低開発の山岳地域にあって発展的様相を呈する農村をとりあげ，経済成長下のその変化の実態を検討する」「特にその発展の基盤を就業機会，世帯経済，教育水準の側面から考察し，その特徴を明らかにする」と述べる。

問題意識の明確さは，地域の選定基準にも投影される。本論文によると，K村の特徴として，①英国植民地時代から避暑地として発展してきた都市：ナイニーターールの近郊に位置すること，②道の改良を契機にナイニーターールとのアクセスが改善され，都市近郊農村としての性格を呈するようになっていること，

③観光客の急増で，近年ではさらに変化を遂げていること，が指摘されている。岡橋はこれらの「変化」に注目し，都市成長の影響が予見されるK村を選定したという。

このように岡橋論文では，対象地域は執筆者によって意図的に選定され，RQ の答え＝地域の発展条件も明示的に説明されている。論文は構造的にデザインされており，地域の概観とテーマにもとづく事例研究に分けて叙述されている。現地調査の結果を網羅的に並べるのでなく，一定の視点からそれらを精選し再構成して報告するところに，岡橋論文の特質があるだろう。

４．２論文の時系列的比較

本章では，米倉論文と岡橋論文を４観点から比較することで，約 40 年にわたる広島大学文学部地理学教室のインド研究における地域研究の「作法」とその背景にある「地域のとらえ方」の違いを見ていきたい。

（１）地域の研究目的と方法

米倉論文では対象地域を研究することは自明であり，研究目的や方法は特段に記述されていない。これらの点が緩やかながらも記述されているのは，米倉報告書「序論」の「第３節　本調査の発端，計画と経過の概要」である。ここには ３回にわたるインド（とバングラデシュ）の調査が，科研の助成を契機に実施された経緯が記されている。具体的には，一連のインド調査の究極の目的は，「日本人自身による観察と資料蒐集によるインド地誌の完成」にあったこと，その初年度の調査として，「インド社会の基盤をなす農村の集約的な調査をめざすこととした」とある。ここから米倉論文では，「まずはインドの農村を日本人自身の手で調査し，データを収集すること」が重視されていたことが伺える。

これに対して岡橋論文は，第１節に明記されているように地域を取り上げる視点と目的を「経済発展と地域格差問題」に焦点化している。この経緯は，岡橋報告書の「はじめに」にも子細に記述されている。すなわち，一連の調査は，①経済自由化とグローバル化の進行にともなって階層間格差・地域間格差が拡大していく中で，国レベルのマクロな議論で捉えられない地方の動きに注目したこと，②ウッタラーカンド州は山間部の低開発地域という周辺性の強かった土地柄ながら，新工業化政策によって急速な工業化を達成できた点で際立つこと，③この地域を産業開発の展開とそれにともなう地域経済の発展，そのような状況下での都市・農村の社会変動を現地でのフィールドワークにもとづいて実証的に明らかにしようとしたこと，などが背景として挙げられている。

このように研究目的には違いが目立つが，研究方法では２つの論文に明確な違いは認められない。いずれの論文においても，現地スタッフの協力のもと，論文の執筆者である米倉や岡橋自身が当該地域へ出向き，村落の悉皆調査を実施している点では共通している。大坂ほか（2015）で岡橋が語ったように，広島大学は長年のインド農村の調査にもとづいた調査票を作成・更新しており，それを代々受け継いでいるという。

時代を異にする２つの論文を比較すると，調査の方法論は，データの比較を担保するべく持続的に洗練される一方で，調査の問題意識では，より一層の焦点化と先鋭化が図られていることが伺える。

（２）地域の選定規準

米倉論文では，調査地域の選定は対象地域の側に依存していた。米倉報告書「序論」の「第３節　本調査の発端，計画と経過の概要」には，日本の農村と比較考察をする便宜からインド東部の水田農村から選ぼうとしたこと，またインド官民から調査への協力・援助が期待できる場所にせざるを得なかった経緯が記

述されている。また実際にタムルク地方の調査地域を選定するにあたっては，地域の都市計画委員をしており，現地大学の地理学教室のスタッフでもある大学教員の伝手を頼りに郡の首長と面会し，調査の許可を得られた村を選定したという。このように米倉論文では，コネクションの少なさ，土地勘のなさなどの制約から，期待するフィールドを主体的に決めることが難しかった当時の状況を垣間見ることができる。

これに対して岡橋論文では，先述のように，論文中に対象地域の選定意図が明示されている。岡橋報告書の「はじめに」や大坂ほか（2015）での岡橋の語りによると，選定作業では，前と同じように地元大学の地理学教室の教員の地縁を頼りに，大学院生の協力を得ながら現地の首長と交渉し，同意を得たという。しかし，現地の教員は日本への滞在経験もあり，広島大学文学部地理学教室とも日常的に交流をしていたという。先方には，あらかじめ調査の意図を伝えることで，候補地をスムーズに絞り込むことができたことが推測できる。岡橋論文の調査時には，米倉論文の当時に比べると，より主体的に目的に即して地域を選定できていたと想定できる。

このように地域選定で主体性が高まったのには，調査者の側に情報が蓄えられ問題意識が芽生えたことに加えて，継続的なインド研究の結果，対象地域の側に人的ネットワークが形成されたことも無視できないだろう。

（３）地域の記述スタイル

米倉論文は，情報量の豊かさと没価値的な地域の描き方が，記述スタイルの特徴である。「シェジュール」には，村落の立地，人口・世帯構成，産業構成，民族・カースト構成，世帯構成，飼育する家畜の種類，日々の生活などを尋ねる質問項目が含まれる。米倉論文は，写真や図版を多用することで収集したデータの公表に努めている。ただし，必ずしも「シェジュール」通りの記述ではない。村の概観に始まり，人口と産業を軸にした地誌記述の枠にデータが収められ，文章化されていく。データを考察する視点は特段に明示されない。地域の状況を再現するとともに，他地域との比較を通して緩やかに特色を浮き彫りにしていく帰納的アプローチを採用しているのが米倉論文である。

これに対して岡橋論文では，情報は一気に精選される。しかも，解釈の提示を厭わない。調査表で得られたデータで不十分と判断すれば，岡橋らを含む調査隊の印象や解釈・推測も積極的に表現していく。また岡橋論文では，対象地域の特色を外枠から規定した表現も散見される。例えば，所得階層の区分では，村の各世帯をインド国内の分類基準にもとづいて４段階に階層化して示し，地域の経済格差を析出しようとしている。一定の指標から地域の位置づけや多様性を見いだす演繹的なアプローチを，部分的にも採用するのが岡橋論文の特徴である。

このような記述スタイルの違いは，１つは，先述のとおり，データと人的ネットワークの差異に起因すると解される。知識の量的・質的な充実があるからこそ，著者は確信をもって解釈を引き出すことができる。もう１つは，研究を取り巻く学術的状況の変化である。大坂ほか（2015）が指摘するように，広島大学の地理学者グループは，現在，他の大学や研究機関と連携してインド研究を推進している。かつては地理学者（多くは系統地理学者）を主体とした地域の総合的研究＝地誌学研究として行われたインド研究も，次第に複数のディシプリンにもとづく地域の学際的研究＝地域研究へと変化してきている。すなわち，研究者内部集団の学的な深化と，外部集団との連携の強化が，山岳農村の発展条件をクローズアップして説明するという研究のカタチを生み出したのではないだろうか。

５．結論－真正な実践の示唆－

本稿では，地理学者が執筆した２つの時代の地域調査論文を手がかりに，地理学者が日常的に行っている「真正な実践」の実態と，その変容・成長のあり方を明らかにした。これらの成果が教師の教材研究に示唆するものは，以下の３点である。

① 地理学者の「真正な実践」は，現時点の（最新の）研究だけでなく，かつての（古典的な）研究と対比することで，その特質が明らかとなる。すなわち，真正な「実践」を理解するには，「実践史」＝研究史を分析することが有効である。

② 地理学者の「真正な実践史」には，研究者らの学びのプロセスが投影されている。地理学者は，フィールドのデータそのものを学び，それを読み，解釈していく研究者集団の視点や方法を学び，そして対象地域に向けられる社会や学界の動向・関心に学ぶ傾向にある。

③ 「○○地域」の特色を究明するために地理学者が学んだことは，「○○地域」の特色を指導する教師が学ぶべきこと，と同義である。このような学びが，「○○地域」に関する教科書の理解を助ける。

地理教育では，同一地域をめぐる異なる時代の研究を比較するとき，教科書記述に投影された専門家の意図と意味づけを内在的に理解することができる。本稿の冒頭で高校地理教科書の読み方について問題提起したように，インドに関して「なぜ経済成長に注目するのか」「なぜ農村の変化を取り扱うのか」を理解し，教育内容の背景とその構造・体系を説明しようとすると，本稿のような手続きをとることが有益なのではないだろうか。

参考文献

大坂遊・岡橋秀典・草原和博（2015）「地理学者がおこなう「真正な実践」の解明－地理教師による教材研究のための地理学論文の読み解きに示唆するもの－」『学習システム研究』（2），pp.79-94。

岡橋秀典(2007)「広島大学のインド地誌研究」『地理』52（2），pp.46-52。

岡橋秀典（2009）「躍進するインドの光と影－経済自由化後の動向をめぐって－」『立命館地理学』（21），pp.43-57。

岡橋秀典（2011）「新興経済大国・インドにおける低開発地域の変貌－ウッタラーカンド州の事例から」『広島大学大学院文学研究科論集』（71），pp.99-110。

岡橋秀典（2014a）「山岳地域農村における就業機会の拡大と世帯経済」岡橋秀典編『現代インドにおける地方の発展　ウッタラーカンド州の挑戦』海青社，pp.165-184。

岡橋秀典（2014b）「日本の地理学におけるインド地域研究の展開－1980 年代以降の成果を中心に－」『広島大学現代インド研究－空間と社会』（4），pp.15-27。

岡橋秀典・番匠谷省吾・田中健作・チャンド，R（2011）「経済成長下のインドにおけるヒマラヤ山岳農村の変貌－ウッタラカンド州の事例－」『地理科学』66（1），pp.1-19。

金田章裕ほか編（2013）『地理 B』東京書籍。

広島大学総合地誌研究資料センター編(2006)『総合地誌研　研究叢書 42　広島大学総合地誌研究資料センター二十年の記録と記憶』広島大学総合地誌研究資料センター。

藤原健藏編（1997）『総観地理学講座 2　地域研究法』朝倉書店。

正井泰夫・竹内啓一編（1999）『続・地理学を学ぶ』古今書院。

村上誠編（1999）『総合地誌研　研究叢書 34　現代インドの農村－その四半世紀の変貌－』広島大学総合地誌研究資料センター。

村山裕司編（2003）『シリーズ人文地理学 2

地域研究』朝倉書店。
矢ヶ崎典隆・加賀美雅之・古田悦造編著(2007)『地理学基礎シリーズ 3　地誌学概論』朝倉書店。
米倉二郎編著 (1973)『インド集落の変貌－ガンガ中下流域の村落と都市－』古今書院。

著者

大坂 遊　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
草原 和博　広島大学大学院教育学研究科